

令和7年産「びわほなみ」の生育概要と 次年産に向けた重点技術対策について

令和7年8月20日
滋賀県湖北農業農村振興事務所
農産普及課

本日の内容

1. 令和7年産「びわほなみ」の生育概要
2. 「びわほなみ」における重点栽培技術

1. 令和7年産「びわほなみ」の生育概要

【10月中旬～下旬(ほ場準備)】

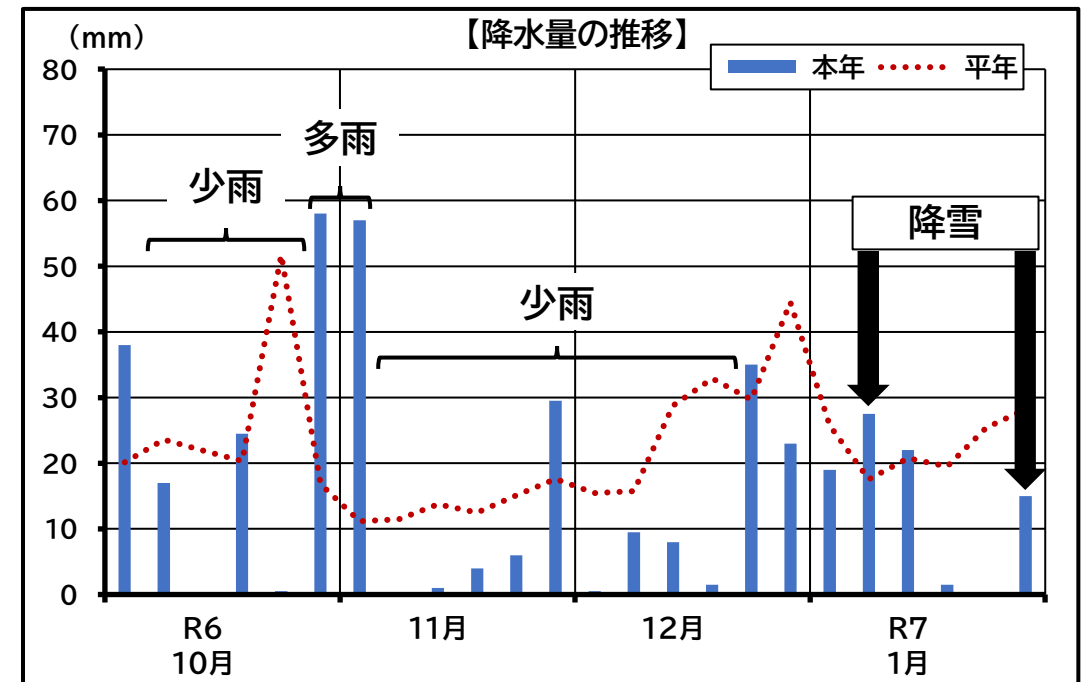
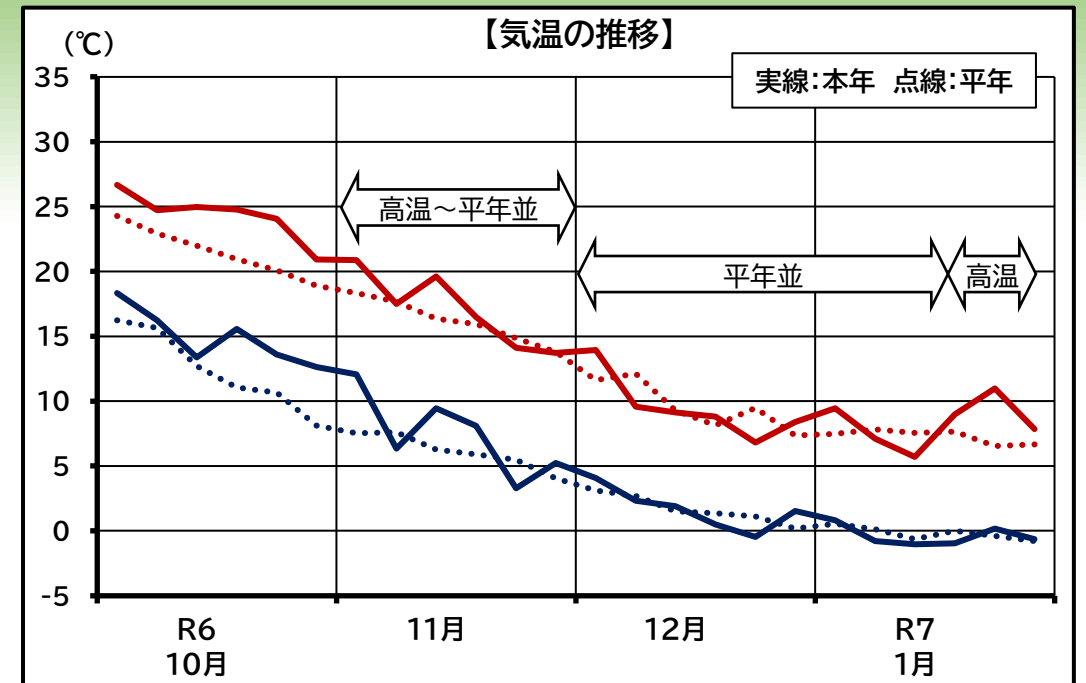
→10月末～11月初めにまとまった降雨があったが、概ね少雨傾向で推移したため、ほ場準備は順調に進んだ。

【11月(播種期～出芽期)】

→少雨傾向で推移したため播種作業は順調に進み、気温も平年より高い～平年並で推移したため、**出芽や初期生育は順調**であった。

【12月～1月】

→12月上旬～1月中旬は気温が平年並で推移し、散発的にまとまった降雨があったものの少雨傾向で推移したため、**適期に播種されたほ場では生育が順調に進んだ。**



1. 令和7年産「びわほなみ」の生育概要

【2月～3月中旬】

→2月上旬～3月中旬は気温が低く推移し、積雪も多くあったため**生育が抑制**され、特に大豆跡など、**播種が遅れたほ場では生育抑制の傾向が強くなった**。
また、2月からの積雪や定期的な降雨により、**排水不良のほ場では湿害**が見られた。

【3月下旬～5月中旬】

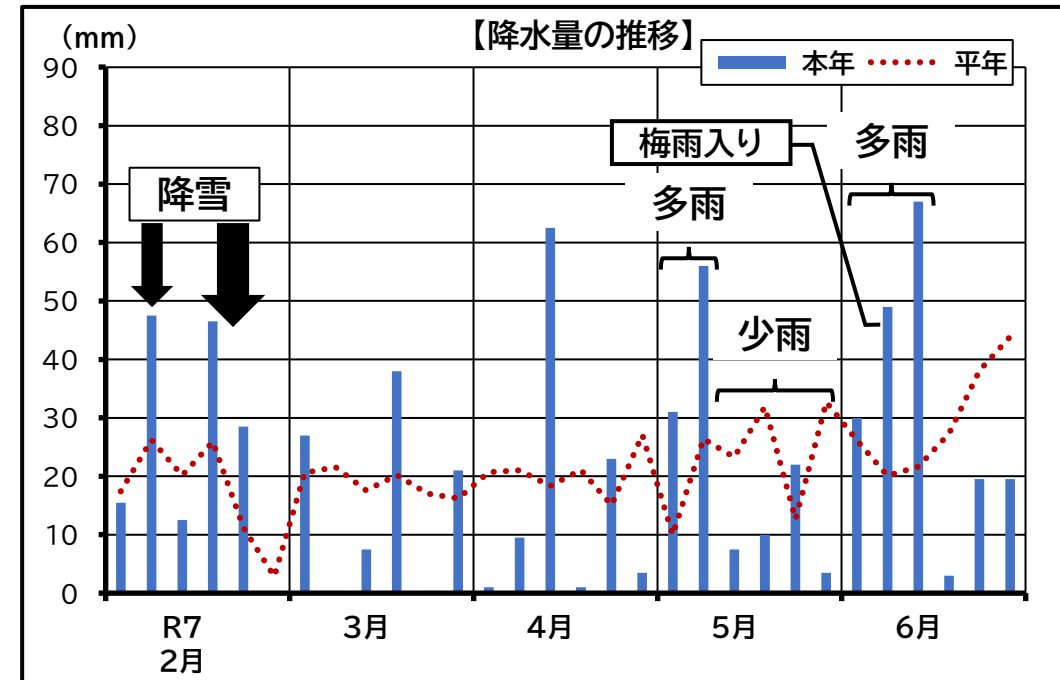
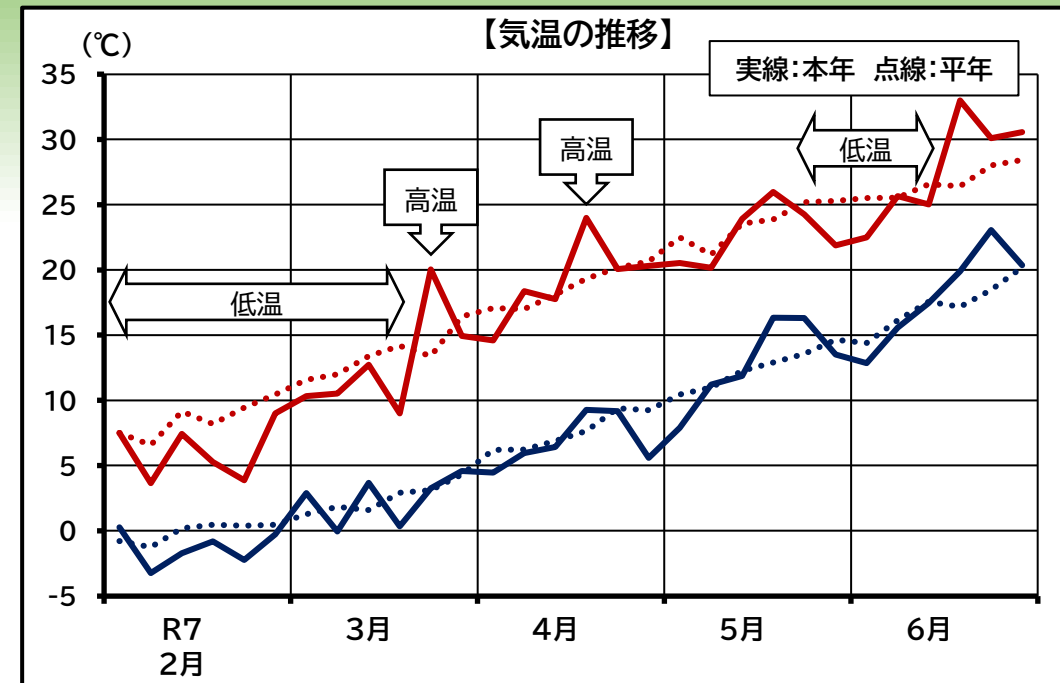
→3月下旬と4月中旬に高温となる期間があったが、遅れている生育が回復するまでには至らなかった。

【開花期】

→4月下旬頃～5月上旬にかけ開花期を迎えた。**5月上旬に開花期を迎えたほ場では、降雨が多くなったため、赤かび病が多発したほ場もあった**。

【収穫期(6月上旬～中旬)】

→6月9日に梅雨入りしたが、止み間が多くあったため、収穫は進んだ。
6月中旬の降雨以降に収穫されたほ場は、**穂発芽など品質の低下が見られる**。



2.「びわほなみ」における栽培技術

黒節病対策にも！

【(1)排水対策】 麦栽培において最も重要！

- ・麦は湿害に非常に弱い
 - 排水対策が麦の収量を大きく左右する
 - 十分な溝の深さを確保、生育途中の補修も重要
- ・播種までに土壌を乾燥させると土壌が細かく砕け、播種の精度が高まり、出芽が揃い、除草剤の効果も高まる
- ・水稻作付時から排水対策を視野に
 - 水稻早生品種の作付による作業の早期化
 - 適切な中干し、溝切りで乾きやすいほ場へ



湿害により正常に発芽しなかったほ場



水稻収穫後もしっかり残った溝切り跡

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(2)土づくり】

- ・麦類は酸性土壌に弱く、土壌pHが低いほ場は適正值にすると収量が増加
- ・石灰資材(粒状苦土石灰など)を施用
 - 土壌pHを目標値である6.5に調整
 - 100kg/10aを目安に施用

	pH6.0以下	pH5.0以下
小麦	2割減収	3～4割減収
大麦	2割減収	8割減収

土壌pHと麦類の減収程度

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(3)適切な播種(播種時期、播種量)】

- ・分げつが旺盛な品種のため、早播きや厚播きすると茎数過剰になり、**黒節病**が発生しやすくなる。
- ・秋播性程度が低い品種のため、早播きすると暖冬年では幼穂形成期や茎立期が早まり、**凍霜害**、**黒節病**や**縞萎縮病**などの病害が発生しやすくなる。

早播き
厚播きを避ける



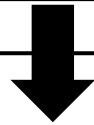
地域	播種適期	播種量
湖辺・平坦地	11月5日～11月20日	8kg/10a
中山間	11月5日～11月15日	

※**黒節病**や**縞萎縮病**が過去に発生したほ場では特に注意！

2.「びわほなみ」における栽培技術

【参考1）コムギ縞萎縮病】

- ・ウイルスが病原
- ・秋期に感染し、冬期間の潜伏期間を経て早春に発病、一般的に気温の上昇に伴い回復へ向かう
- ・発生生態は主に温度環境(気温)により決まる



・秋期の気温低下が遅れ、春先の気温の上昇が遅い
年に被害が最も大きくなる

令和6年産は
条件に合致

・令和7年産では一部ほ場で見られた
が、令和6年産より少ない発生となった



令和7年産で確認されたほ場

令和7年産においても
早播きのほ場で確認され
たため、適期・適量播種
の徹底が必要

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(4)施肥体系】

	基肥 (播種時)			穂肥 (2月中旬)			実肥 (4月下旬～5月上旬)			合計
体系	肥料名	施肥量 (kg/10a)	窒素量 (Nkg/10a)	肥料名	施肥量 (kg/10a)	窒素量 (Nkg/10a)	肥料名	施肥量 (kg/10a)	窒素量 (Nkg/10a)	総窒素量 (Nkg/10a)
省力体系	麦パンチ	40	14	麦用セラコート R2500	20	5	尿素	5	2.3	21.3
分施体系①	麦用セラコート R2500	30	7.5	麦用セラコート R2500	40	10	尿素	5	2.3	19.8
分施体系②	国産化成肥料 444	40	5.6	麦用セラコート R2500	50	12.5	尿素	5	2.3	20.4
後期重点 体系	国産化成肥料 444	15	2.1	セラコートR スカイ	35	15.4	尿素	5	2.3	19.8

2.「びわほなみ」における栽培技術

【参考2）実肥施用（タンパク含量向上）】

- ・穂肥に緩効性肥料「麦用セラコートR2500」を使用した場合でも、茎数が多いほ場ではタンパク含量の低下が見られます。
 - ・当課の調査ほ場においても、省力体系（麦パンチ＋麦用セラコートR2500）で見られました。（びわほなみの許容値である8%以下）
- ⇒ 許容値を下回ると品質ランクが下がります

Aランクの条件；基準値を3つ以上達成し、かつ許容値を全て達成している

たんぱく9.7～11.3%、灰分1.60%以下、容積重840g/ℓ以上、フォーリングナンバー300以上

- ・出穂期前後の生育をよく観察し、葉色の低下がみられた場合は、出穂10日後（開花期）に追肥を施用し、**タンパク含量**を向上させましょう。

2.「びわほなみ」における栽培技術

【参考3）後期重点施肥の特徴】

- ・基肥を減らし、穂肥を大幅に増量

- ・茎立期までの生育を抑制し、有効茎歩合を高めて最終的な穂数を増加させ、収量を向上させる

- ・登熟後半まで葉色を維持し、千粒重やタンパク含量を増加させる

【留意点】

- ・排水対策を徹底した上の技術であること

- ・基肥を減らし初期生育を抑制するため、湿害ほ場では生育がさらに抑制され、必要な初期生育が確保できないため適さない

- ・初期生育を抑制しているため、条間から雑草が発生しやすく、体系処理が必要となる場合がある

- ・穂肥は茎立期（主茎長2cm）に施用し、遅播きでも2月末までに施用する

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(5)雑草管理(エンドウ類)】

- ・2下旬～3月上旬にはほ場を確認し、発生が多いほ場では、3月上旬のカラスノエンドウが生え揃った時期に、除草剤(MCPソーダ塩)を散布する。

カラスノエンドウは麦子実と混じると選別が困難となるため、特に注意が必要！



2月上旬頃のカラスノエンドウ



ほ場内で繁茂したカラスノエンドウ

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(5)雑草管理(タデ類)】

- ・2下旬～3月上旬にはほ場を確認し、発生が多いほ場では、除草剤(ハーモニー75DFやバサグラン液剤等)を散布する。

※播種時に「ハーモニー細粒剤F」を使用する場合は、使用回数の上限により「ハーモニー75DF」を使用できないため注意

収穫時、コンバインの故障等にも繋がるため、適切な防除を実施しましょう。



2月上旬頃のタデ



ほ場内で繁茂したタデ

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(5)雑草管理(畦畔雑草)】

- ・ほ場の現状を確認し、雑草が見られる場合は草種に応じた除草剤を散布する。
- ・大半は**畔周辺や畝の肩**などから、雑草が侵入するため、本格的にはほ場内に侵入する前に非選択性除草剤等(ほ場内の周縁部登録剤)で防除する。(麦生育中も可)
- ・種子で増殖する雑草が多いため、種子を作らせない管理が必要
- ・水稻を栽培する際もカメムシ等の温床になるため、麦作からの対策が重要

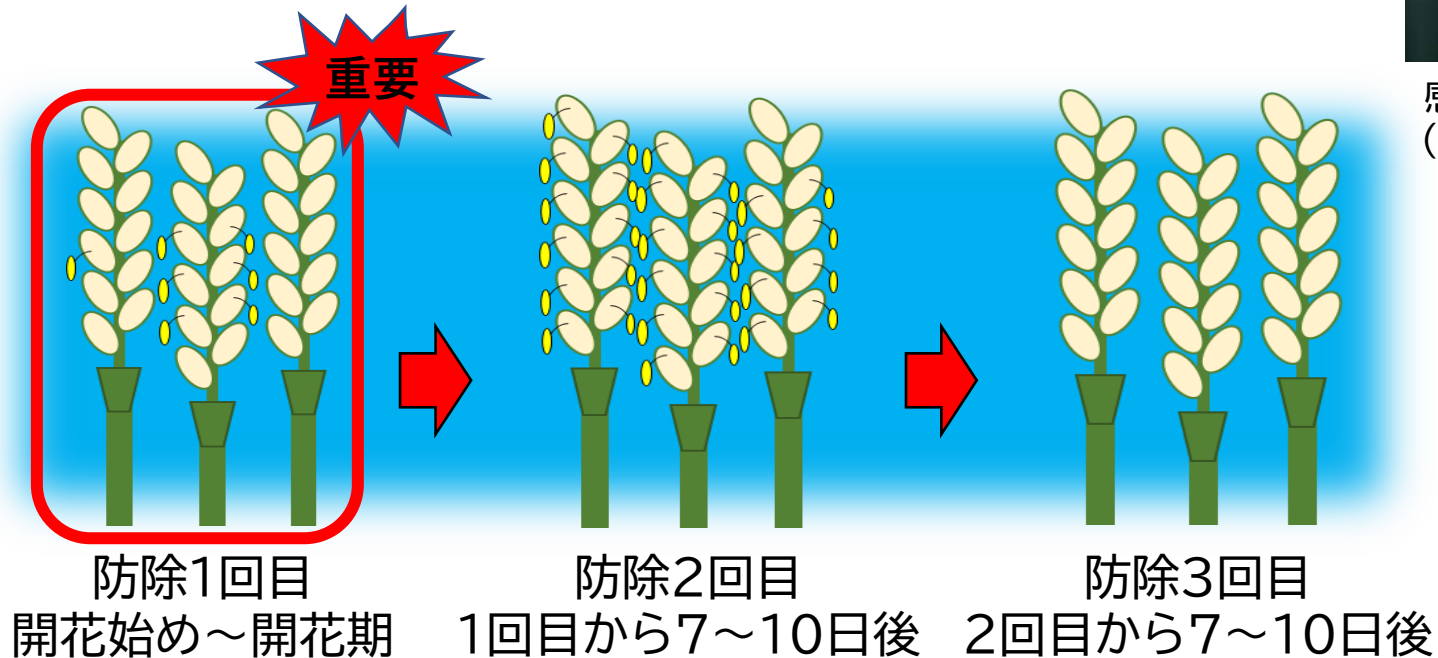
※水稻収穫後に雑草が多く、麦播種前耕起では処理が難しい場合は、非選択性除草剤を使用



2. 「びわほなみ」における栽培技術

【(6)赤かび病防除】

- ・「びわほなみ」は赤かび病に弱いため、
必ず2回防除を行う。
(注意報や気象状況によっては3回目を実施)



感染した「びわほなみ」の穂
(滋賀県病害虫防除所提供)



穂全体に感染した「びわほなみ」の穂

2.「びわほなみ」における栽培技術

【参考4)赤かび病(カビ毒)】

- ・赤かび病が発病すると、多くは不稔または被害粒となる
- ・農産物検査では赤かび粒の混入限度が**0.0%**(1万粒に4粒以下)と定められている
- ・発病した粒にはカビ毒(DON、NIV)が含まれており、多発すると流通(出荷)できないことがある

びわほなみ



健全粒

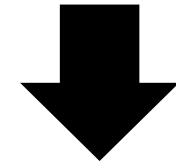


被害粒

2.「びわほなみ」における栽培技術

【(7)適期収穫】

- ・子実水分が25%以下になってから収穫
→25%の目安は爪先で粒がなんとか割れる程度
- ・収穫が早すぎて水分が高くと、穀粒の損失や品質の低下が発生
- ・刈り遅れると、脱粒の増加、容積重の低下や穂発芽による品質の低下が発生
- ・収穫後は速やかに乾燥施設へ搬入
- ・露のつきやすい早朝、降雨後の収穫は避ける



2.「びわほなみ」における栽培技術

【参考5）穂発芽】

- ・穂発芽とは、収穫期前の降雨によって、穂上の子実が発芽する現象をいいます。
- ・「びわほなみ」の穂発芽性は「やや易」と評価されており、気象条件により穂発芽するため、注意が必要です。
- ・農産物検査では、**2%以上の発芽粒混入がある場合は規格外**となります。

※**穂発芽**すると子実に含まれるでんぷんが分解され、品質(加工適性)が著しく低下します。



2.「びわほなみ」における栽培技術

【重点技術のまとめ】

- 排水対策の徹底……麦栽培で最も重要
⇒排水口から水がスムーズに流れ出るように工夫する、生育途中の補修
- 土づくり(pHの矯正)
⇒酸性土壌では減収、適切な土壌pHに調整
- 適期・適量播種を徹底(病害対策)
⇒縞萎縮病、凍霜害等を助長する早播き・厚播きは避ける
- 施肥体系
⇒適切な窒素量を施用して収量確保、後期重点施肥はほ場を選ぶ必要あり、実肥の施用で収量、品質を向上

2.「びわほなみ」における栽培技術

【重点技術のまとめ】

- ・雑草の発生状況に応じた雑草防除

⇒雑草多発ほ場では生育途中の体系処理が必要

- ・適期の赤かび病防除……「びわほなみ」では特に重要

⇒特に1回目の防除を開花始め～開花期に実施することが重要

- ・適期収穫の徹底

⇒適期収穫で穂発芽等による収量、品質の低下を防ぐ